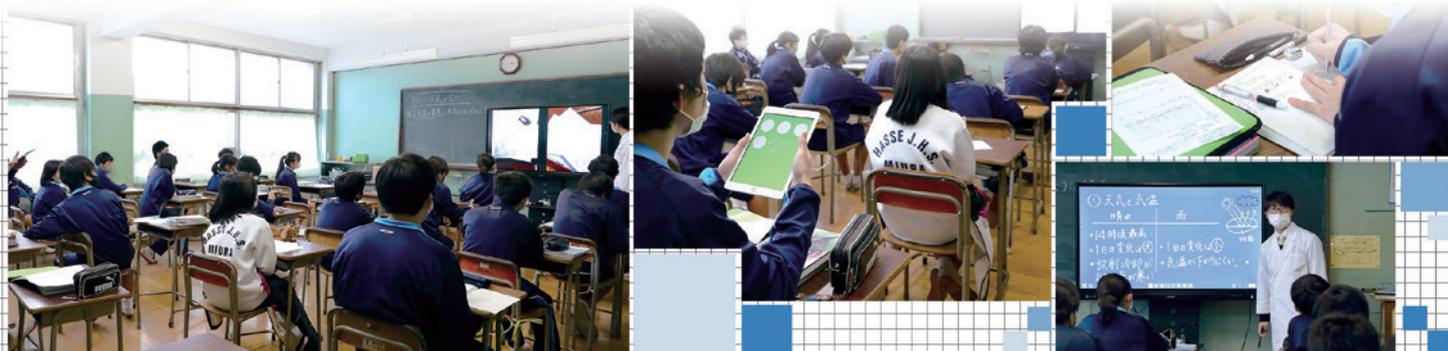


導入事例

らくらく
ボード

らくらくボード・iPad連携によるインタラクティブな授業が実現 意欲の向上にも直結! 解いた課題を瞬時に大画面で拡大表示



三浦半島の豊かな自然に囲まれた環境で、様々な教育目標の実現に取り組まれている三浦市立初声中学校。「一・小・中」の長期視点による丁寧な指導を強みに、ICTを活用した教育も推進されています。

そんな同校で「らくらくボード」を活用して理科の授業が行われている数崎正信先生に、電子黒板の活用について詳しく伺いました。また、町田直軌校長、三浦市教育委員会・学校教育課の荒井俊彦指導主事にもご同席いただき、学校におけるICTの取り組みについてお話をいただきました。



導入商品

らくらくボード
IWB-651EB

※ディスプレイは別売りです。

先生と生徒が、同じ画面を見て学ぶことの大切さ

充実したICT環境で授業を行われていましたね。生徒2人に1台のiPad、それをWi-Fiルーター経由で「らくらくボード」と連携されていました。

数崎先生:今日の授業では、気象について学ぶために、班ごとのグループワークを行いました。配布したプリントを元に課題を解き、成果が記入できたiPadで撮影して共有します。それを「らくらくボード」の画面で大きく表示して発表しあったり、私が説明を加えたり。例えば気象や電気など、理科では目に見えない題材をよく扱いますが、「らくらくボード」があれば画面への書き込みなどで補いながら、しっかり説明することができます。グラフなども電子黒板があれば説明しやすいですね。



様々な生徒の学びをサポートするために、それぞれ適した入り口を

電子黒板だと、「前に出て操作したい」という気持ちが高まるのでしょうか。

数崎先生:皆の前で発表できるという点はたしかに意欲につながるようで、手はよく上がります。一方で、発表は苦手だという生徒のために、ハードルを下げる効果もあると思います。例えば「皆の前に出るのは抵抗があるが、手元のiPadに書き込むことはできる」という生徒も。それならiPadを見ながら自席で発表してもらって構いません。もちろん画面は電子黒板で共有できます。



従来のツールと比較して、電子黒板のメリットはどこにあるのでしょうか。

数崎先生:教科書の指定したページを開くように言葉で指示した時、すぐに開ける生徒もいれば、数字に苦手意識があるためにパッと対応できないという生徒もいます。またどこを見ればいいのか今一つピンとこないという生徒も。そういった時に、該当のページが電子黒板に表示されていて、さらに私が見るべき場所を指し示してあげることができれば非常に良いサポートになります。言葉で受け止めて表現するのが得意な子、苦手な子……、それぞれにやりやすい入り口を用意してあげることに意義があります。

町田校長:「電子黒板を使った授業は1時間が早い」という生徒もいて、集中力がより高まることが窺えます。また、耳から入ってくる情報よりも、視覚情報のほうが集中しやすいと感じる生徒もいます。こうした生徒にとっても、電子黒板は助けになるでしょうね。

荒井指導主事:自身がこれまで携わってきた授業の経験から、視覚で伝える重要性は認識しています。従来から現場では、大型ディスプレイやプロジェクターなど様々なツールを使って視覚に訴える授業をしてきたかと思いますが、これからは単なる視聴に留まらず、インタラクティブな方向での活用が期待できますね。

コロナによる休校を契機に、授業の効率化を検討

板書については、授業中に先生が書かれるのではなく、すでに書きあがっていたものをワンクリックで表示されていましたね。

数崎先生:本年度はコロナ対策として休校が重なり、授業数が減ってしまったという背景があります。限りある時間を有効に使うために、できるだけ無駄を削減してスリム化しようと考え、休校中の時間にすべての板書を用意しておきました。用意した板書のデータをプリントとして配布すれば、さらなる時短にもつながります。

町田校長:これから社会に出ていく生徒たちの能力、思考力を鍛えるためにも、教育現場のICT化は急務です。電子黒板についてはこれから本格導入が進みますが、それを使い教える教員側の研鑽も求められています。数崎先生ら若手が中心となり活用を進めてくれること、期待しています。



取材にご協力いただいた先生



三浦市立
初声中学校

町田 直軌 校長



三浦市立
初声中学校

数崎 正信 先生



三浦市教育委員会
学校教育課

荒井 俊彦 指導主事



CLIENT DATA

導入学校 / 三浦市立初声中学校
所在地 / 神奈川県三浦市
設立 / 昭和22年